

國學院大學學術情報リポジトリ

コーラ・ダイヤモンドの言葉が響くとき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): コーラ・ダイヤモンド, 志賀直哉, 人類学, 生/死, 文学 キーワード (En): 作成者: 中村, 沙絵, Nakamura, Sae メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000268

コーラ・ダイヤモンドの 言葉が響くとき

中村沙絵

深く動揺する魂の傍にとどまる

人からはなかなか理解されない現実に苦しむこと、あるいは、そのようにして苦しむ人が傍らにいて、どうしたいかわからなくなってしまうことがある。はじめてC.ダイヤモンドの文章を読んだとき、そこに登場する人物たちが、なぜか私には親しみ深く感じられた。それは不思議な感覚だった。後になって考えたことだが、そう感じられたのは、その「深く動揺する魂」(ダイヤモンド 2010 (2003): 92) が、過去の私や、私の知る人たちのそれとどこか重なるものだったからではないか、と思っている。過去の私や、私の知る人たちの、なかなか公には認知されない、しかし意識をつかんで離さない言葉やイメージに、やさしく光をあててくれるものだったからではないだろうか、と。

例えば、ダイヤモンドは論文「現実のむずかしさと哲学のむずかしさ」(2010 (2003))で、小説家J.M.クッツェーの著作『動物のいのち』(クッツェー2003(1999))をとりあげ、その主人公エリザベス・コストロの考察に紙幅を割いている。このコストロという女性、私には、初めて会ったようには思えなかった。

少し内容を紹介したい。『動物のいのち』は、動物倫理の文脈で大きな反響を呼んだ作品として知られる。著者のクッツェーは、1997-1998年、2度にわたってプリンストン大学のタナー記念講義に招待されている。お題は、人間による動物の扱い方をめぐる倫理的問題。自ら肉食主義者でもあるクッツェーは、このお題をめぐる彼の思索の遍歴についてそのまま講演することもできた。しかしそうはしなかった。彼は手の込んだ仕掛けをした。「オーストラリア出身の女流小説家で肉食主義者のエリザベス・コストロが、息子の勤務する大学に招待され、人間による動物の扱いをめぐる問題について講義をする」という小説を彼が披露する、という形式をとったのだ。クッツェーは、自らを半ばコストロに重ねるようにして——コストロという「仮面」をつけて(中川2010)——語り始めた。人間が動物に対してしていることで自分の肉体が傷ついている、と言い、人間が動物

に対して行なっていることへの恐怖を「神経を剥き出しにして」吐露した。『動物のいのち』は、この講義をめぐる一連のやりとり、すなわちコストロの（／仮面をつけたクツェーの）言葉と会場にいた学者たちからのリフレクションとが収められた本である。

コストロの、ときに強烈で直接的な表現に——例えば彼女はホロコーストと精肉工場を並べて話したりもした——聴衆は衝撃を隠せない。コストロはそんな聴衆たち——その中にはもちろん学者もいる——とやりとりをしながら徐々に返答が支離滅裂になり、家族にも声を聞いてもらえず、ひとり孤立を深めていく。他方、本にリフレクションを寄稿する学者たちは、戸惑いながらも、物事を順序づけて整理し、学者としての本分を果たそうとする。クツェー／コストロの意図は、いったいどこにあるのか。それは、動物の権利擁護をめぐる「過激な平等主義」という議論を提示することにあるのか。はたまた、かけ離れた感受性をもつ者の間で倫理的衝突を解決する方法について問題提起をすることにあるのか。そうやってかれらは、クツェーが〈フィクションという枠組みを用いて言わんとしたこと〉、そしてその〈論理的妥当性〉について、論評を加えていく。

ダイヤモンドが先の論文で問題にしたのは、学者たちの反応に反映されるような、アカデミズムの態度だった。学者たちはコストロという女性を、動物解放論に関連する哲学的論証のために持ち出された手段のように扱っている、とダイヤモンドは言う。このような扱いをするとき、私たちは、人間と動物の関係について根本的な何かを見落としてしまう。その「何か」とは、端的にいえば次のようなことだ。それは、曝されてあること、肉体が傷つくこと、思考の無力さの感覚をもつこと、これらの点において、私たちは動物であるということだ。コストロ（／クツェー）は、彼女（彼）の肉体が傷ついている、と言った。その孤立は、肉体の中で感じられている（「…私は自分に言う、落ち着きなさい、あなたは大きさに考えているのだと。これが人生というもの。ほかの人はみな折り合いをつけている。どうしてあなたにはできないの？ どうしてあなたにはできないの？」（クツェー 2003: 118)）。コストロ（／クツェー）の講義は、私たちに肉体に住むように求める呼びかけである。そうダイヤモンドは言う。しかしコストロの講演をめぐってかわされる哲学的議論は、かれら自身、あるいは読者に彼女の肉体にすむことを回避する方法を提供してしまっている。その声を、「私たち人間は動物をどう扱うべきか」「どのような権利を与えるべきか」といった哲学的議論に還元することは、コストロ（／クツェー）の傷から逸れることに他ならない。こうして「逸れる」私たちは、いとも簡単に、想像の中で動物の死体に住むという能力を拒絶するだろう。コストロの肉体に住むということにすら、考えが及ばないのだから。

コストロが人知れず苦悶する姿に光をあてながら、ダイヤモンドは、コストロの極端ともとれる主義主張ではなく、むしろ隠しきれない深い魂の動揺のほうに

私たちの意識を向けさせる。そして、「深く動揺する魂」の傍らに留まり、急ぎ足で通り過ぎないような——S.カヴェルの言葉を借りれば「魂一盲」(Soulblindness)に陥らないような——哲学の可能性を追求する(カヴェル2010)。

この論文を読みながら、私は、友人や、学生や、フィールド(人類学的フィールドワークを行ったスリランカの老人施設のこと、詳しくは後述)にいたときの自分を想う。そして、その傷ついた女性の姿に見覚えがある、と感じる。ダイヤモンドが追究していることは、人類学者としてのみならず、一人の人間として大事なことだ、と考えてみる。同時に、そう簡単なことでもない、とも思う。コストロの苦しみの傍らにダイヤモンドが心をおいていることが、救いのようにも、また戒めのようにも感じられる。

「深く動揺する魂」の傍らにとどまり、急ぎ足で通り過ぎないことを実践するとは、どういうことなのだろう。それは果たして実践可能なことなのだろうか。もし可能であるならば、そのために学問は、あるいはより広義に、こうして「書く」ことは、何ができるのだろうか。

ダイヤモンドは、学問一般においては論証的でdiscursiveな言語活動がその軸にあることをふまえつつ、彼女自身の文章においてはしばしば小説や詩を登場させる。私たちがもし、深い魂の動揺のほうに意識を向けるのであれば、学問一般(それ自体が難しい問題であることは重々承知の上で、ここではconventionalな学問一般の傾向、すなわち「確からしいことを確からしく書く」という傾向を念頭において話をすすめたい)におけるのとは別様の書き方を模索することが肝要だと、示唆するかのように。

本稿で私は、哲学的論証と小説や詩とを行き来しながら書き、思考したダイヤモンドを導きの糸として、私自身のフィールドワークと民族誌を書く経験を振り返る。博士論文や単著では明示的に書かなかったことだが、コストロに部分的に重なる、過去の自分に光をあててみたいと思う。そして、その作業に示唆をあてた小説や民族誌の言葉をかりながら、「深く動揺する魂」の傍らにとどまり思考すること、またそのための「書く」という行為の可能性について、考えよう。順序としてまず、2007~2010年にかけてスリランカでフィールドワークを行っていた頃にもどり、ある看取りの経験について記述する。次に、この経験をふりかえる際にヒントを与えてくれた著作として、志賀直哉の『城の崎にて』(小説)と、人類学者リサ・スティーヴンソンのモノグラフ(民族誌)を紹介し、これらを經由して、ふたたびダイヤモンドにもどってこよう。

スリランカにて

私はスリランカのシンハラ語話者が多く暮らす地域で、都市郊外にある養老院

のような施設を中心に、2年強のフィールドワークを行った。現地の公用語の1つであるシンハラ語（もう1つはタミル語）で、ヴァディヒティ・ニヴァーサ（高齢者の家）とかマハル・ニヴァーサ（老人の家）とかいう風に呼ばれていた施設だ。

住み込みでフィールドワークを行ったのは、島南西部の港町に建つ歴史ある施設。ふきぬけの大部屋で、私の調査していた2000年代後半は、常時150名前後の人が暮らしていた。性別、出身地、宗教、階層などは一様ではない。元校長先生というような人から、肉体労働者として各地を転々としてきた人までいた。貯金や年金があれば入居金や滞在費を払い、余裕がなければ無料で過ごすこともできる。要するに、そこはいわゆる身寄りのない高齢者を対象とした慈善型の施設だった。さまざまな理由で家族や親族など既存の関係から離れた人々が、寝食の場を与えられながら、場合によっては死を迎えるまでを過ごす、そのような場所であった。

合計20名の職員が働いていたが、10名程度の未婚女性で構成されるフロアスタッフ、寮母、数名の職員は、施設内の寮で暮らしていた。私は施設の理事長にお願いをし、その寛大なサポートを得て、多少の入居費を支払いながら職員たちと一緒に寝泊まりし、フロアスタッフ見習いとして働かせてもらいながら、フィールドワークを行う機会を得たのだった。

この施設は定期的に医師が診察にやってくる、投薬のアドバイスなどもする、「運営の行き届いた」施設であった。けれども、富裕層が入所するような24時間看護サービス付きのナーシング・ホームとは違い、やはり医療的介入は限られていた。フロアスタッフの仕事は、まずは紅茶や食事の配膳、必要な入居者には水浴びや食事の介助、投薬管理や傷口の手当など、身の回りの世話にあたることだった。仕事に慣れてきた頃から、私はシックルームと呼ばれる、末期の入居者たちが過ごす離れの部屋の担当になった。末期の入居者たちとはいえ、最低限の医療的介入しかなされない。基本的な身体的不調には投薬がなされるが、延命治療はなく、経口栄養が基本で、食べ物を指先で細かく砕き、水分を多く含ませるなど工夫して、可能な限り食べさせる看護をする。いよいよ飲み込めなくなると、スープや紅茶に切り替えていくが、そうなればおよそ1～2週間ほどで死は訪れるのだった。私とほぼ同年代のフロアスタッフたちは、体が不自由になり、身の世話をスタッフや同居者に頼むしかない入居者の目の前で、ときおり「こんなに生きていても仕方がない」などと吐きすてるように言った。その傍らで入居者たちは、医療的介入をほとんど受けることなく、静かに死んでいった。

僅か20歳前後の女性たちがこんなに大変な仕事をしているのかと感心もした。だが、そこでの看取りのやり方に違和感がないわけではなかった。

入居者の多くは、家族が老後を扶養したり、最期を看取ったり、葬式を十全に執り行うことができないという事情をそれぞれに抱えていた。施設で死を迎えるその姿は、老親扶養の文化規範がまだ根強いスリランカでは、大きな抵抗感を

抱かせる事態だった。そのことは、村落や都市郊外の高齢者世帯でもフィールドワークをしていた私には、自然と理解できることだった。けれども、彼女たちのやり方を表面的にしかみていなかった私は、自分にとって自然な「ケア」のイメージ——例えば人類学者のアネマリ・モルが描いたような、当事者と周囲の人やモノとが係り合い、「よさ」を模索して調整をくり返すような協働で、彼女は“tinkering”（いじくりまわす、不器用にあれこれやってみる）という言葉これをこれにあてた (Mol et al. 2010) ——が後景に退いていることに、正直戸惑っていった。フロアスタッフたちの待遇の低さを考えれば仕方ないことだ、などと考えることで、やり過ぎたりもしたが、そこで起きていること、自分が行っていることが、「よい」「ケア」に向かっているのかどうか、迷いは消えなかった。食べられるまで食べさせ、飲み込めるまで飲み込ませ、徐々に少なくなっていく排泄物を水で洗い流し、体をきれいに保つ。それが「よい」かどうか決着のつかないまま、あるいは「議論」することのないまま、私はそこでの看取りのやり方、声のかけ方を身につけていった。

看取りにかかわった人たちが1人、2人と亡くなっていったのは、その行為そのものを自然とこなせるようになった頃のことだった。なかでも強く印象に残ったのは、わたしがディンギリアンマとここで呼ぶ、とある女性入居者を看取った経験である。

以下に書くようなことは、決して毎日のように起きていたことではない。数えてみても、滞在中に3、4度起きた程度だろうか。もっとあるかもしれない。しかし、そんなに頻繁に繰り返されたのでもなかった。いわゆるこの施設の「日常」ではなかった。

ディンギリアンマは未婚の女性で、子どもはいなかった。親戚は他州におり連絡が途絶えていたが、姪が隣町に暮らしていた。入所後に乳がんが見つかったが、姪の付き添いのもと手術入院をし、がん細胞はすべて取り除かれていた。その後の再発はなかったが、胴体部分の不要物を排出する管が傷つけられ、片方の腕がひどくむくんでいた。背は低くふくよかで、入居者やスタッフと冗談を言い合うのが好きだった (中村 2017)。

ディンギリアンマは2008年の秋ごろから「思考力が低下」し、施設内を徘徊しては唾を吐いて、周りから煙たがられていた。それでも仏日には戒を守ろうと、白い服を着て廊下に出てきていた。2010年の3月中旬、ベッドから何度も落ちたことで足腰を痛め歩行が困難になり、シクルームへ移った。移った当初は食欲もあったが、4月に入ると食事は受けつけなくなり、やがて飲み物もほとんど飲まなくなっていった (中村 2017)。

そんなとき、4月13日、火曜日のことだった。フィールドノートには、興奮した調子で、こう書かれている。

ディンギリアンマ、紅茶を欲しいという！コップ四分の三ほど飲ませる。全部飲んだので、マルカンティも驚いている。夜……ディンギリアンマにネストモールと薬を飲ませようとする、初めは「水が欲しい」という。水をやった。次にご飯が欲しいという。驚いて台所へ向かい、ご飯とおかず、汁をよくこねて、スプーンで口へ運ぶ。ついだ量が少なかったが、全て食べる！

その後、また水を欲しがると「ぬくい」という。何回か言ってから、ようやく理解する。そこで、水道水をコップについで口に入れる。三口あげると、手でコップを押さえ、「十分」と口が動く。その後、行こうとすると、「ノーナ！水！」とっては、三回続けて水を欲した。三回とも蛇口の水をあげた。さいご少し水が残った。マルカンティは「またほしがるかもわからないから」といって、「もう少しのみな」といって水を口にのける。ディンギリアンマは「はい、はい（大丈夫）」とかすれた声で言う。（中村 2017：315-316）

紅茶やスープもろくに飲めず、薬を飲みこむのも苦勞していたディンギリアンマが、急に夕食を欲しいと言ったこと、更に、口に運んだものをすべて飲み込んだことは、私にとって「出来事」であり、大きな喜びでもあった。しかし、翌朝の事。

シクルームに入ると、珍しく、他の棟の入居者が二名来ていた。筆者ははじめ、てっきり新年の挨拶だと思い込み、勢いよくカメラを構えた。しかし、デジカメの液晶画面にうつったディンギリアンマの様子も、ベッドサイドの入居者も、少し様子がおかしい。近づくと、ディンギリアンマが硬直していた。細い右手は口のあたりでとまり、動かない。顔が黒ずんでいると思ったら、目と口の周りを何百もの小さい黒アリが覆っている。唖然としている筆者のところへ、フロアスタッフのカンチャナが来てこういった「朝一番に、紅茶をもって、『ディンギリアンマ！』って叫びながら部屋に入ったんだ。そしたら、目にはいつか来た。見た途端、悲しかった」。きっと筆者を氣遣って語り掛けてくれたらうカンチャナに対して、筆者は唖然としたまま、蟻はどうにかしないのか、蟻をとろうか、と聞く。カンチャナは待つように言い、……殺虫剤をもって帰ってきた。……アシリンとエマリンは同室者の死にもかかわらず、いつも通り言い争っている。耳の遠いアヌラは、大きい声で「死んだの？」などと聞いてくる。ざわざわとうるさいシクルームの中で、筆者は動揺を隠せないでいた。それは、食べさせること、薬を飲ませることに夢中になっているうちに急な死が訪れたことに対する動揺であり、目の前の光景に対する動揺でもあった。自分の食べさせ方が悪かったため蟻がたかり、ディンギリアンマが痛い思いをしたのではないか、という思いからの罪悪感もこれを強くした。（中村 2017：316-317）

この看取りの後、私は施設での仕事をこなしながら、だんだんと自分の行為や存在の無意味さにとらわれていった。わかりやすいことと言えば、それまでびっしりつけていた清書用のフィールドノートも、この頃からほとんど書かれていない。「確からしいこと」、見聞きした事実を書き残すという行為の意味が、わからなくなっていくのだと思う。それは、何がよいことかが定まっている日常の世界が裂開してしまうというような感じだった。

存在することを許容してくれる記述

どんな経緯だったかももう覚えていないけれども、スリランカからの帰国後、ふと志賀直哉の『城の崎にて』を手にとって読み、そこに何か近いものを感じ、自分の抱えていた問題に気づいていった、ということがあった。

『城の崎にて』の主人公は電車にはねられ大けがをし、一命をとりとめたあと、養生のために訪れた城崎温泉で、蜂と、ネズミと、イモリの死に遭遇する。最後にでてくるイモリに関しては、殺すつもりはなかったのに、ふと投げてみた石が当たって死んでしまう、まさにその瞬間に遭遇する。

自分はしゃがんだまま、わきの小鞆ほどの石をとりあげ、それを投げてやった。自分は別にイモリを狙わなかった。狙ってもとても当たらないほど、狙って投げる事の下手な自分はそれが当たる事などは全く考えなかった。石はコツと行ってから流れに落ちた。石の音と同時にイモリは四寸ほど横へ跳んだように見えた。イモリは尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思っ
てみていた。最初石が当たったとは思わなかった。イモリの逸らした尾が自然に静かに下りてきた。すると肘を張ったようにして傾斜に堪えて、前へついていた両の前足の指が内へまくれ込むと、イモリは力なく前へのめってしまった。尾はまったく石についた。もう動かない。イモリは死んでしまった。(志賀 2020 (1928) : 116)

このとき主人公は、いかにも偶然だったがとんでもないことをした、という嫌な気持ちを抱く。そして次の引用にもあるように、自分が偶然生きていることを感じながらも、これに対しての喜びは湧き上がらず、むしろどこか生きているリアリティが失われているような感じを覚えている。話は、その宙ぶらりんな感覚とともに幕を閉じる。

自分は飛んだ事をしたと思った。虫を殺す事をよくする自分であるが、その気が全くないのに殺してしまったのは自分に妙な嫌な気をさした。… [中略] …イモリと自分だけになったような心持ちがしてイモリの身に自分がなってその

心持を感じた。可哀想にと想うと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかった。イモリは偶然に死んだ。

… [中略] …自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際喜びの感じは湧き上がっては来なかった。生きている事と死んでしまっている事と、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かった。視覚は遠い灯を感じるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確かだった。(志賀2020 (1928) : 116-117)

イモリを殺してしまった後、生きのこったことについて淡々とした深い戸惑いを抱く主人公に、私は親しみを覚えた。ケアや看取りに関する学術書や、スリランカでのフィールドワーク中に教えてもらうなどした上座仏教の「教え」などに立ち返ってみてもじっくりこず、結局、概念とは、経験とのあいだに距離をうんでしまうものなのかもしれない…などとあきらめかけていた私にとって、この文章との再会は、大きな転機ともいえるものだった。

本稿のもとになった研究会で、古田徹也さんが「どうして志賀直哉だったのか」という主旨の質問をされた。どうしてなのだろう。自分のなかではじっくりくろのに、言葉にしたことはあまりない。だからここで言葉にしてみようと思う。

一つには、世界の裂け目で戸惑う主人公の姿が、当時からひきずっていた感覚にずっと重なった、ということがある。おそらく『城の崎にて』の主人公は、一度事故に遭い、死をある程度は身近に感じていたはずだ。だからこそ、小さき生き物の死がくりかえし目にとまったのだろう。しかし、観念的な死への親近感をこえて、「死んでしまっている状態」をまさに内側から同調するように感じ取ってしまったのは、イモリの死との遭遇においてではなかっただろうか。

さっきまで生きていたイモリ。そして、生きているのか、なぜ動いているのか、よくわからない瞬間をコンマ数秒はさみ、それが死んでしまっていることに主人公が気づく。その様子が、先の(一つ目の)引用文では細かに(細かすぎるほどに)描写されている。この細かい記述が、私の経験に重なった。ディンギリアンマがまさか死んでいるなど考えていなかった私が、その状態に同調させる身構えで部屋に入ったその直後、「死んでしまっている」彼女を認識する。口の前まで挙げられて硬直した細い右手も、その手の下で今は蟻に覆われ黒ずんでいる口元も、数時間前までは、食事や水をほしがり、飲みこみ、そして「十分」だと告げてくれた、ディンギリアンマである。その瞬間、鈍い痛みや息苦しさが襲ってくるようだった。志賀のいう「生きている事」と「死んでしまっている事」が両極ではない、という表現は、こうして期せずして内側から死を味わってしまうような体験を指しているのではないだろうか。もっといえば、このようにして死んでしまっている者の肉体に一瞬でも住んでしまったことからくる深い動揺を示して

いるのではないだろうか。これは、ダイヤモンドのいう「想像の中で動物の死体に住む」ということにおおよそ重なるのではないだろうか。どうだろうか。いずれにしても、そのような深い動揺を、判断したり、厳密に論じる対象とするのではなく、ただ記述をとおして〈居場所を与えてくれる〉のが、『城の崎にて』の淡々とした描写だった。言葉が与えられ、存在が許容され、私はふたたび、当時の経験をつりかえることができるようになっていった。

『城の崎にて』を経由して自分の経験をふりかえることで、もう一つ、わかったことがあった。それは、私は「ディンギリアンマを殺した」と思っていて、このことがショックだった、ということだ。

これには少し説明が必要かもしれない。

先に私は、施設での看取りに違和感を抱いていた、と書いた。実際、「こんなに生きていても仕方がない」と言い、ときにかれらをあざけるようなそぶりを見せるフロアスタッフに、私は入居者たちを「社会的死」に追いやるジェスチャーを感じることがあった。だからこそ（半ば無意識かもしれないが）入居者たちに寄り添おうと、「声」や「ニーズ」にアンテナをはり、可能であれば通常のフロアスタッフたち以上の関わりをしていた。そこで慣習的に行われている看取り方を身につけながらも、そのやり方に確信がもてずにいた私は、「彼女たちはどうかかわらないけれども、自分は最後まで入居者たちを「人」としてみるのだ」と心に決めていた。だから、この主人公のように、まさか私が「殺してしまう」などとは、思っていなかった（主人公の方は、いわば無意識に、自分の生きている事を確かめるようにして、石をなげたかもしれないが）。

あのときをふり返りながら徐々にわかってきたことは、私は、施設での老病死の現実を、「声」や「ニーズ」という形に対象化することで受け入れているに過ぎなかった、ということだった。人類学者のS.カウフマンは、米国における病院での死を扱ったモノグラフのなかで、患者が「自己同一性、欲望、ニーズを表現しなければならない者」として扱われる状況が生まれた経緯を考察している（Kaufman 2005）。彼女によれば、患者が「経験する人格（experiencing person）であるという考え方——すなわち、彼が深い精神的内奥をもち、あらゆるニーズを表現しなければならない存在だという理解——は、1950年代以降、フロイトの影響を受けたアメリカの精神医学・心理学において発展したものだ（Kaufman 2005: 66）。そのうち、医学が疾病だけでなく「老齡」や「死」をも管理するようになると、老い衰えゆく人は「死にゆく人」（dying person）としてではなく「人格—としての—患者」（patient-as-person）として扱われることになったという。そして「全人的医療」の名の下、いかにしてこの「人格—としての—患者」の「声」や「ニーズ」を聞きだし、こたえるかということに、家族や医療関係者が意識を集中させるようになったと述べている（中村2017: 21-22）。「施設での老病死の現実を、「声」や「ニーズ」という形に対象化することで受け入れているに過ぎ

なかった」とは、言い換えれば、フィールドワークをしていた私も、およそ無意識にこの前提を抱いて過ごしていた、ということだ。施設での生死の現実に徐々に接近することで、私は、このようにして世界を対象化できていた私そのものを失っていったのだと思う。代わりに、私という存在が、生の根本的な条件に曝されていることに、改めて気づき始めたのだとも思う。

ディンギリアンマに食事を与え、口に水を注いできたのは私だ。それがのどに詰まったのか？何が起きたのか？死因は調べられることがないので、わからない。けれども、私の指で潰しきれなかった何かが詰まってしまったのかもしれないし、注ぎこぼしたカレー汁だか米粒だかに、蟻がたかったのは、およそ確かではないかと感じられた。私とディンギリアンマは、とても近くにいた。フィールドワークの最後の数か月、私は目の前の人の生死を左右してしまうほどの近さまで接近していた。その状況において看取りをすることは、その人をいつ傷つけ、いつ殺してしまうか分からない近さで世界の中に存在するということだった。私はディンギリアンマに対して暴力を帯びた存在であり、同時に、彼女と共に、根本的な生の条件に曝されてもいた。通常のフィールドワークのように、「確からしいこと」を見聞きし書き連ねていくような主体は、とっくに浸食されていた。

志賀の文章は、こうして不確かになっていく私の輪郭をふくめ、まるごと受けとめてくれるものだった。ダイヤモンドの言葉もまた、看取りの経験における魂の動揺を、なかったことにするのではなく（逸れるのではなく）、もう一度とどまり、見てみようとするのを後押ししてくれるものだった。他者に曝されて生じた情動的経験を、剥き出しになった神経を、取るに足らないものと通り過ぎるのでも見たくないものと目をつぶるのでもなく、根本的な生の条件の顕れとして受けとめ、そこから何かを書く／実践することはできるのだろうか、という問いが湧き上がってきたのは、そのような省察を経てからだった。

イメージ、そして歌へ

冒頭にこう問いかけた。「深く動揺する魂」の傍らにとどまり、急ぎ足で通り過ぎないとはどういうことか。本稿では高齢者施設というフィールドでの自身の経験と、志賀直哉とを往復しながら考えてきた。もし、そのような実践が可能なのだとすれば、少なくとも私にとってそれは「書く」という行為と深く切り結ぶといえそうだ。そしてそれは、書かれたものの形（form）やジャンル（genre）をめぐる柔軟な実験に関わるものでもあるようだ。

上に書いたことの多くは——特に志賀直哉や自分自身の動揺の理由などについては——博士論文にも、またこれをもとにした著書にも書いていない。それは、私にまわりついていたconventionalな形・ジャンルの呪縛所以だったのかもしれない（しかしその呪縛？故に書けたこともあるのだが）。

人類学は厳密な実証主義や論証を根幹とするわけではない。とはいえ、多くの人に共有された出来事の解釈やある程度フィールドで繰り返されたことで確認された民族誌的事実 (ethnographic fact) の積み上げが重視される。フィールドワークでの、誰にでも通用する教えを挙げるとすれば、測れるものは測れ、数えられるものは数えよ。長期のフィールドワークをする場合には、フィールドの人々のふるまいや規範、生き方のようなものを、不完全な形であれ、徐々に身につけること。発話内容を言外の意味も含めて理解し、特定の状況で期待されているふるまいや言葉を理解し、返せるようになっていくこと。このような手続きを経て、あるものの考え方・やり方・価値観がそこで間主観的に共有されているかどうかを明らかにする。ある一定の期間、その場で時間を過ごすことで分かってくる「確からしさ」。その確からしさに裏打ちされた読み物が、信頼に足る民族誌として、一般に想像されるもの。

このようなイメージをぼんやりと持っていた私が、13年頃前だったか、はじめて民族誌を書こうとしたとき、なかなか書き始められなかったことを昨日のこのように思い出す。調査地で出会った人一人ひとりや彼女たちと過ごした時間について、ただ「確かなこと」を積み重ねていくようにして書き表せば、フィールドで感じ、考えたことの多くが削ぎ落とされてしまうだろうことは明らかだったからだ。ではどのような形で、どのようにして書くのか。結局、納得のいく答えも見出せぬまま、必死になって書ききったわけだが、この問題は、あの時の（傷ついた）私の肉体に棲むような記述を目指すのであれば、とても大事なことだ。その課題にやっとこたえようとしているのが、今なのだともう。

L.スティーブンソンの民族誌、*Life Beside Itself* (2014) を初めて読んだときもやはり、*ダイヤモンド*を読んだときと同様に、とても心強く感じた⁽¹⁾。彼女はその美しいモノグラフで、躊躇いや迷いを許容するような人類学的な聴き方、書き方の重要性を、掘り下げて考えようとしていたからだ。

〈明晰に理解できないものをも、正当な民族誌の対象とする〉という同書の基本的態度は、不確かな中でのフィールドワークでは、事実を集めることより、事実が曖昧になる瞬間に注意を払うことが大事である、という直観に基づいて得られたものだという (Stevenson 2014: 2)。スティーヴンソンにとって重要だったことは、躊躇いの瞬間に注意を向けると、「研究者」と「対象者」の間の距離は縮まってゆくという点にあった。そうなれば、書く主体が書かれる客体を明晰判明なかたちで書くというのではなく、不確実で不透明な現実をともに生きる、ということになる。ともに生きる、とは滑らかな言葉だが、他者の経験がそのままわかるということではない。むしろ、躊躇いの瞬間のなかにある彼の感覚に私もまたとらわれている、というとらわれの経験を尊重することを意味する。

では、事実が曖昧になる瞬間を、どう記述するのか？ スティーヴンソンの民族

誌の特徴は、明晰さが求められる言語（だけ）ではなく、イメージ的な思考が重要な役割を果たす点にみとめられる。イメージ的とは、定式化をこえた何か（something beyond formulation）で私たちをくぎづけにするような性質をさすのだという（Stevenson 2014 : 12）。イメージ的な思考においては、不確実性や矛盾は解決されるべき問題ではない。むしろそれは、私たちがくぎづけになっている瞬間の経験の質、濃さのようなものを顕わにするものとして、そのままにされる（フィールドで出会った友人にとって、亡くなったオジの影がうっすらみえるような、裏庭のワタリガラス（raven）が「何者（として解釈されているか）」を書くのでなく、「オジかどうかわからないけど、今日もそこにいる」とその光景にとらわれている彼（そして私）の経験の質をあらわすことに意識が注がれる）。なぜイメージが重要かという、私たちは、真理を、いつも事実とか情報（それ自体が検証できるような）の形で欲しているわけではなく、ときに、自身の感情の濃密さにつりあうようなイメージのあいまいさ（opacity）を欲するからだ、と彼女はいう（Stevenson 2014 : 13）。経験や感情の濃密さにつりあうような表現を、文学や詩的表現にもとめる、ということは、まさに前のセクションでもみてきたように、私自身も身をもって経験したことだった。『城の崎にて』のぶつとぎれるような終わり方は、ひりひりした経験をきれいに総括する概念の欠如をあらわしている。強烈な経験をした主人公の、イモリとの死の瞬間とその後を描いた細かい描写においてもやはりまた、事実や情報や概念というかたちではなく、彼を捉えて離さないイメージの方へおりていくことが重要だったのだろう。

もう一つ、スティーヴンソンの書き方から学んだことがある。それは、もし人類学が文化的他者を「理解」する、というプロジェクトに留まらず、スティーヴンソンや彼女の仲間たちが挑戦しているように、「ともに不確かで不透明な現実を生きる」ことへと接続していくのならば、書かれる者（あるいは書く者をも）「何者か」として固定化しつくさず、ただ存在することを許容するような記述が可能になるのではないかと、ということだ⁽²⁾。「スリランカにて」のセクションで書いたように、フィールドワークをしていた当初の私は、入居者たちを「人間として」「人として」ケアすることを目指していた。これは大事なことでもある、と今もどこかで思っている。けれど同時に、少なくとも当時の私は、このような態度をとることによって、私という存在を世界の「外」におき、そうすることで自ら傷つけ、また傷つく存在であることから「逸れ」ていた。本当の意味で私が世界に曝されたとき、私とディンギリアンマの関係についてのある種の真実に私は初めて気づいたのだった。誰かを「何者か」として——たとえばコストロを菜食主義者として——固定化し、ただその主体の位置から語られる言葉にしか、私たちが注意を向けられないのだとすれば、それは、ダイヤモンドにならなければならない、その存在だけでなく私たち誰しもが負う可能性のある傷から、「逸れる」ことを意味する。

たしかに人類学をふくむ社会科学の調査においては、調査協力者を「何者か」としてみる、もっといえば、予め何者かとしてそのアイデンティティを固定化することなしに、その人の声を聞いたり、話しかけたりすることは、容易ではない。でも、不可能ではないかもしれない。かれらが「何者か」を確認し、同定するようなことはできない、そのような戸惑いのなかにながらも、その存在を「伴侶」(company)として想起し捜し求めるような言葉のことを、スティーヴンソンは「歌(song)」と呼ぶ(Stevenson 2014: chap.7)。彼女は、言葉の内容よりも、その音、あるいは音が発されていて、その振動を感じ取っている存在がいるということに意味を求めているのだ。ジュディス・バトラーがいう呼びかけ(interpellation)が、他者がある主体として存在せしめる、つまり、「何者であるか」、その主体の位置を固定化するような言葉のパフォーマティヴィティであるとするならば、「歌」は、聞く者が何者かを決めつけたり、あるいは聞く者に何かを求めるのではなく、ただ声を聞いているという存在(あるいは声それ自体)として、そこにいることを許容するのだとも、彼女は述べている。歌によって寄り添われたとき、私は、誰かに認識してもらっていながら、かつ、「何者か」に(暴力的に)固定化されることもないまま、存在することを許容される。歌うことは、そんな希望のもとで、そんな余地を作り出す行為であるということなのではないだろうか。

ダイヤモンドの言葉が響くとき

把握することではなく、世界へ「曝される」のを受容することが思考の責務である、という、ハイデガーがダイヤモンドと共有する態度は(ウルフ 2010: 36)、こうした人類学的探究に、ひとつの心強い軸を与えてくれる⁽³⁾。この指摘は、まさに私自身のフィールドワークの経験とも、またスティーヴンソンの美しい民族誌とも響き合う。

ただ、本稿の最後に、ダイヤモンドの言葉たちが私にもっとも響いてくるのは、まさにこうした剥き出しの神経をうけとめ、なだめ、うまく対応することが不可能であるように思われるまさにその瞬間である、ということに言及して、終わりたいと思う。

冒頭にこう書いた。人にはなかなか理解されない現実にしむこと、あるいは、そのようにして苦しむ人が傍らにいて、どうしたらいいかわからなくなってしまうことがある、と。私たちの多くは通常、「逸れて」いる。もちろん、何らかの衝撃で、あるいは必要に駆られて、動揺する魂の傍らにとどまろうとするかもしれない。しかし、その現実が抵抗してくる感触に耐えられず、「逸らす」ことで平静を保とうともするだろう。その結果、それぞれが孤立感を深めることになったとしても。

世界へ「曝される」のを受容するかしないか、まさにそのとき、私たちは何をすべきかわかっていない。目の前の誰かが、深く動揺して語りかけてくるとき、私はどうしたらいいかわからない。動揺を来して言葉を発する者を前に、どういふ言葉をかけるべきなのか、彼女の声をどうやって聴くのがのぞましいのか、さっぱりわからなくなってしまうことがあるし、そんなとき私はひどく緊張してしまう。神経が剥き出しになり、通常通りに動けなくなったあの頃の自分を、しばらくのあいだ自分の奥底に隠してきたように（それをすくいだしたのが『城の崎にて』の記述だったわけだが）、とらえどころのない存在が侵入してきたその瞬間、いわゆる他律の法のようなものはかすんで見えなくなってしまう（cf ウルフ 2010）。このことを、私は経験的に知っている気がする。ダイヤモンドの言葉が私のなかに響いてくるのは、まさにそういうときではないだろうか。

謝辞

この論考は、小手川正二郎先生が招へいしてくださったワークショップ「哲学・文学・人類学——コーラ・ダイヤモンドの思考を手がかりに」で発表したアイデアをもとに、大幅に加筆したものです。発表の機会を下された小手川さん、そしてその場に集まってくださり有意義なコメントをくださった皆さん、どうも有難うございました。また、本稿に加筆した内容は、(故)林行夫先生主催のワークショップ（「近現代アジアにおける仏教の所在と社会的役割」）、東京大学GISセミナー、大村敬一先生にお声かけ頂いた放送大学の授業（「フィールドワークと民族誌」）でのやりとりを通して練りあげられたものです。ここにすべて名前を挙げられませんが、深く謝意を表します。

注

- (1) 少し説明すると、同著はカナダ東部極北圏（現ヌナヴト準州）に生きるイヌイトの若者たちのあいだで書かれた民族誌である。カナダ政府による国民化政策を受け、特に結核流行を契機にした医療・福祉による統治を受けて大きく変貌してきたこの地域は、1990年代以降、自殺のパンデミックに見舞われた。この本には、彼女がフィールドで出会うことになった、身近な人の死などもはや珍しいものではない若者たちの生活世界が、その日常の質感もふくめて、繊細に描き出されている。とくに、彼女にとって自明であった「ケア」や「愛」のかたちを揺るがした、若者たちの不確かで躊躇いがちな、生（死）への態度が描き出され、「生きていること」に至高の価値を見いだすような現代の福祉レジーム、あるいはそれを支える植民地主義的な「知り方」への批判ともなっている。
- (2) これは、哲学者スタンリー・カウエルが、その論文「伴侶的思考」（『＜動物のいのち＞と哲学』、春秋社所収）のなかで、ウィトゲンシュタインの相貌の概念に関連づけながら「魂-盲（soul-blindness）」について述べていることに依拠している。私たちが世界を共有する存在を「人間」としてみることで、その伴侶（companion）としてのポテンシャルに気づくことは異なるのだ。
- (3) C.ウルフのいうように、「…生けるものとして私たちは、彼らに対し、答えようも返しようもない、それゆえいつまでも人を動揺させるような、いささか奇妙な種類の責任あるいは負債を感じる。これはダイヤモンドの論文の初めのところで力強く切り開かれた論点である」（ウルフ 2010：65）。このような責任のなかで考えるのであれば、「もはや哲学を、制

御として、分析的な範疇や概念によってつかみ把握するような種類のものとしてみることはできない。それはハイデガーにとって「一種の昇華された暴力 (sublimed violence)」のように思われる。むしろ、思考の責務は「逸れる」ことではなく、カヴェルのいう世界へ「曝される」のを受容することであり受苦することですらある」(ウルフ 2010 : 36)。

引用文献

- カヴェル, S. 2010 (2008) 「伴侶的思考」 S.カヴェル, C.ダイヤモンド, J. マクダウェル, I.ハッキング & C.ウルフ著 『〈動物のいのち〉と哲学』 中川雄一訳 春秋社 pp.133-173. (Cavell, S. Companionable Thinking. In S. Cavell, C. Diamond, J. McDowell, I. Hacking & C. Wolfe, *Philosophy and Animal Life*, Columbia University Press, pp.91-126.)
- クッツェー, J.M. 2003 (1999) 『動物のいのち』 森祐希子・尾関周二訳 大月書店.
- ダイヤモンド, C. 2010 (2008) 「現実のむずかしさと哲学のむずかしさ」 C.ダイヤモンドほか 『〈動物のいのち〉と哲学』 中川雄一訳 春秋社 pp.77-132. (Diamond, C. The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy. In *Philosophy and Animal Life*, Columbia University Press, pp.43-89.)
- Kaufman, S. 2005. *And a Time to Die : How American Hospitals Shape the End of Life*. Chicago University Press.
- Mol, A. et al. 2010. *Care in Practice : On Tinkering in Clinics, Homes and Farms*. Transcript Verlag.
- 中川雄一 2010 「傷ついた動物と倫理的思考のために (訳者まえがき)」 C.ダイヤモンドほか 『〈動物のいのち〉と哲学』 中川雄一郎訳 春秋社 pp. 1 -25.
- 中村沙絵 2017 『響応する身体——スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌』 ナカニシヤ出版.
- 志賀直哉 2020 (1928) 「城の崎にて」 『小僧の神様 他十篇』 岩波書店.
- Stevenson, L. 2014. *Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic*. University of California Press.
- ウルフ, C. 2010 (2008) 「露わさ」 C.ダイヤモンドほか 『〈動物のいのち〉と哲学』 中川雄一訳 春秋社 pp.29-75. (Wolfe, C. Exposures. In *Philosophy and Animal Life*, Columbia University Press, pp. 1 -41.)